

# 市井に生きる本格長期投資家 株式投資で得た資金、総額1億円で社会貢献

いの はな ふくまつ  
猪鼻福松さん(89歳)

## 株式投資の利益1億円で社会貢献

9月9日、社団法人日本フィランソロピー協会による「第8回 まちかどのフィランソロピスト賞」の贈呈式が東京都千代田区の学士会館で行われた。

同賞は社会に役立つ寄付を行った方を顕彰するもので、今回の受賞者は猪鼻福松さん(89歳)。

猪鼻さんは東京都北区在住の元警察官。若い頃からコツコツと資金を蓄えて株式投資を行い、利益を赤十字社や生まれ故郷の館林市、また生家の近所の人たちが利用する集会所の整備資金などに提供してきた。その総額は実に1億円。

残念なことに、猪鼻さんご自身は転倒による骨折のため、当日の受賞式には出席できなかったが、あらかじめ撮影されたビデオメッセージで登場。病床にもかかわらずかくしゃくとした話しぶりで、ご自分の半生や株式投資の体験談を披露し、何度も会場を沸かせた。

株式投資による資産形成と、その資産を用いた社会貢献は、まさにこれからの長期投資家のモデルといえる生き方。猪鼻さんはどのようにしてフィナンシャル・インデペンデンス(経済的自立)を遂げたのだろうか。

猪鼻さんの半生と株式投資、そして社会貢献活動の一端をご紹介します。

## 株で末路衰れにならないためには……

東京都北区の病院に入院中の猪鼻さんを訪ねたのは、9月の下旬。病室に通じる階でエレベーターを降りたところ、猪鼻さんは廊下のかたわらで看護婦さんたちに囲まれて談笑中だった。ケガなどものもしない自由闊達な話しぶりで、看護婦さんの間でも人気者の様子。好々爺然とした物腰ながら、物事を鋭く見抜く炯眼を備えた人物という印象である。

「今回はご受賞、おめでとうございませう」と挨拶すると、元気良くこんなお返事が返ってきた。

猪鼻さん「いやー、何ともムチャクチャな話でしょう(笑)。私みたいに小学校高等科しか出ていない人間が、株で儲けてボランティアをしていたら、それが(フィランソロピー協会に)見つかって表彰されちゃった。

こんなにうれしいことはない。私はあと少しで90歳だけど、どんどん力が湧いてくる。100歳までいけると思いますよ」

編集部「まだまだこれからも、どうか元気で頑張ってください。

ところで猪鼻さんは、株でつくったお金で社会貢献を続けられてきたということですね」

猪鼻さん「株で儲けようなんて思っちゃいけない。

自分の選んだ会社がどう育っていくのか、それを楽しみにする気持ちが大切だよ」

編集部「では、実際どんな風に株の運用をされてきたのでしょうか？」

猪鼻さん「おもしろいもので、買った株が2年で倍ということもあった。それから、1ヵ月で7倍になったこともあった。

その銘柄は、毛糸などの編み機の会社なんだね。昔はどこの家でも、奥さんが毛糸でセーターやマフラーとかを編んでいたでしょう。

あるとき、その家庭用の編み機のトップメーカーが潰れちゃった。するとこれは危ないというんで、みんながその業界の会社の株を売ったんだね。でも私は違うと思ったんだ。

やっぱり、毛糸の編み物は生活していくのに必需品でしょう。決してなくなることはない。だから、残った業界2番手の株を安値で買ったんだね。1番手が潰れたんだから、今度は2番手が伸びるはずだから。そうしたらやっぱり、その会社の株価が1ヵ月で7倍も上がっちゃったんだ。

こういう面白い話もあるけれど、でも、とても株は人には勧められないね。

相場師とか、仕手筋とか、(半世紀以上)いろんな

人を見てきんだが、その時にどんなに派手にやっ  
いても、みんなしまいには失敗して、破産とか自殺  
をしてしまった。欲をかって株に手を出す奴の末路  
は哀れよ」

編集部「では、投資で末路が哀れにならないため  
には、どうすれば良いのでしょうか？」

猪鼻さん「それには（自分だけ儲けようとしな  
いで）ボランティアをすることだよ（笑）」

## 病弱な少年期、そして戦傷を 負いつつも生きのびる

猪鼻さんは1915年（大正4年）、群馬県館林市の  
生まれ。

父親は農業を営んでいたが、猪鼻さんが4歳の時  
に肺結核で他界してしまう。次兄と弟も同じく肺結  
核で亡くなり身内の早逝が相つぐが、猪鼻さん自身  
も生まれつき腎臓が悪く、少年時代には脳膜炎かっと脚  
気も患ってしまう。医師からは「この子は長くは生  
きられない」と宣告されていたという。

そんな病弱な猪鼻さんをなんとか生かしたいと、  
女手一つで身を粉にして働いていた母親が、毎夜、  
近くの稲荷神社にお参りに出かけ手を合わせていた  
情景を、猪鼻さんははっきりと記憶に刻んでいる。

小学校の高等科を卒業後は、虚弱体質で中学への  
進学がかなわないほどだったが、長兄の農業を手伝  
ううちに徐々に体力が回復。商人になることを志し、  
隣村の雑貨商に奉公に出る。

猪鼻さんは大麦や野菜の産地である館林で、地元  
の農家に肥料や発動機用のオイルなどを売る商売に  
携わり、寝食を忘れて働く。店主からも認められ、  
将来は独立して穀物商店を開く夢を持っていたが、  
折りしも日本は日中戦争に突入。

日々経済統制が強まる中、自由に商品を売買する  
こともままなくなってしまう。そこで商人となる  
ことを断念し、一転して当時軍隊による召集で不  
足していた警官として奉職しようと思立ったとい  
う。

勉強は小学校高等科を卒業以来、まったくの独学。  
にもかかわらず、警官の採用試験を一度でパスし、  
東京・荒川区の下町、南千住警察署に勤務する。

住民からは「笑顔のお巡りさん」「坊ちゃんお巡り  
さん」と親しまれていたが昭和15年、日中戦争が泥  
沼化する中、猪鼻さんも衛生兵として陸軍に召集さ

株式投資で得た利益1億  
円を、社会貢献に寄付し  
てきた猪鼻福松さん。  
「資金はまだまだたっ  
ぱり用意してある。ボラ  
ンティアはこれからもず  
っと続くよ」と語る。



『実直に生きる わが人生に  
悔いなし』（熊谷印刷）

本書は猪鼻さんの自伝。決して何  
もかもが恵まれていたとはいえな  
い境遇の中で、大切に機会を生か  
し、文字通り実直に生きてきた猪  
鼻さんの人生が綴られている。  
株式投資に関する記述はほとん  
どないが、その生き様に触れるこ  
とは、長期投資の上で貴重なヒント  
となるのではないだろうか。

れ、中国各地を転戦する。さらに南方戦線へ送られ  
るが、移送の途中で乗っていた輸送船が撃沈され、  
九死に一生を得るものの、腰椎骨折の重傷を負っ  
てしまう。

制海権と制空権を連合軍が掌握しょうあくし、日本籍の船は  
十中八九撃沈されるという状況下、傷痕軍人となっ  
た猪鼻さんはようやく赤十字の病院船で内地に帰還  
することができた。それ以来、「赤十字は生命を助け  
てくれた恩人」と感謝し、この体験がその後の猪鼻  
さんの社会貢献活動につながっていく。

## 定年まで一巡査として 一署に勤務の異色警察官

復員後は再び巡査として南千住署に勤務。際立っ  
たものだけでも、GHQの占領下、強盗を犯した米兵  
をとらえMP（米軍の憲兵）に引き渡したり、東京国  
体では昭和天皇の巡行中、騒乱を企てた暴漢くわだを事前  
に察知して取り押さえるなどの業績を上げる。

猪鼻さんの勤務ぶりは署内でもトップクラスで、  
表彰を受けるのもたびたびだったが、異色の警官で  
もあったようである。

肩書きは定年間際まで巡査長。なおかつ定年まで

34年余り、南千住署一署に勤務を続けたことも、異例中の異例。転勤や異動を繰り返し、ポストの階段を上がることを良しとする日本社会一般の風潮からみれば、極めて特異なことである。

しかし、猪鼻さん自身は長年なじみのあるコミュニティに身を置き、組織よりも一人の巡査として自分自身が納得のできる働きをすることに、一番の生きがいをおぼえていたようだ。

南千住署の歴代の署長も、猪鼻さんに度々転勤や昇進を受け入れることを求めたが、その度に「署長を脅かしたり、すかしたりして拒否していた」という笑い話のような話も周囲からは聞こえてくる。

### 一介のサラリーマンが 長期投資で潤沢な資産をつくる

さて、猪鼻さんが株式投資を始めたのは戦後、株式市場が再開されて間もない頃だったようである。

当時のことを、猪鼻さんはこう振り返っている。「当時、お金を株式にしておく、銀行預金の利子の倍の配当金がもらえたから、それだけでとても良い運用になりました。ですから、警察の寮費に給料の3分の1を納める以外はほとんどお金を使わなかったし、体が弱かったから、いざという時に備えてコツコツと株を買っていたんです」

本誌の32～33ページで澤上篤人氏も書いているとおり、過去50年間の日本株式の平均投資収益率は実に14.5%。配当金と株価の値上がり益が相まり、一介のサラリーマンだった猪鼻さんが、地道な長期投資を通じ一代でかなりの資産を築くことができたのも、十分に納得できる。

また、この潤沢な金融資産が、昇進に目もくれず、自分自身が納得できる仕事ぶりに打ち込む上で、大きな支えになってくれたことはいままでもないことだろう。

加えて定年後、猪鼻さんは「私は民間会社に再就職しているし、共済年金ももらっている。生活に困っているわけではない」と傷痍軍人年金を返上している。

猪鼻さんの生き方は、年金に依存しない自立した人生の、まさに先行事例ともいえる。

### 「ボランティアはこれからも まだまだずっと続きますよ」

最後になってしまったが、ここで猪鼻さんの社会

昭和30年、赤羽公民館（群馬県館林市赤生田本町）に寄付。

平成8年～11年、大林稲荷神社、長良神社、集会所、子どもたちの遊び場を整備（7000万円）。

平成8年から毎年、館林市民を新宿コマ劇場に招待。

平成10年、日本赤十字社に寄付（1000万円）

平成11年、館林市赤生田本町老人会、館林市赤羽体育祭に寄付。

平成12年、館林市赤生田本町老人会、子供会、館林市赤羽体育祭に寄付。

平成13年より館林市赤羽体育祭、館林市立第5小学校、赤羽公民館に、拡声器・テント・拡大複写機・放送機器・ソファーなどを寄付。

平成16年、館林市役所に寄付（1000万円）。

（以上、寄付総額は約1億円）

貢献活動の内容をご紹介してみたい。主な事歴は上の囲みの通り。

ご覧のように、おもな寄付先は故郷の館林市と、生家のある同市赤生田地区、そして日本赤十字社。

大林稲荷神社への寄付だが、こちらは戦地から生還し、警察官としての職務をまっとうすることができたのは、母親がお参りしていたお稲荷さんの御利益と信じているためである。そこで同神社の新築に際し、費用の全額を負担し、さらに生まれ故郷の住民が豊かに暮らしてほしいという願いから、隣接する集会所と子どもの遊び場も整備している。その総額は7000万円。

赤十字社への寄付は、先述のとおり戦時中、故国へ自分を連れ帰ってくれた病院船を命の恩人と思っているため。感謝と平和への願いを込め、若い頃から毎年1万円づつの寄付を続けていたが、不況により赤十字社に寄付金が集まらず、資金難だということを知り、平成10年に1000万円を寄付した。

また館林市にも平成16年に、「自由にお使い下さい」と1000万円をポンと寄付している。

ほかにも毎年、生家のある赤生田地区の運動会に運営費を寄付。

さらに、館林市と近隣の町に住む耳の不自由な方を招待した、手話を交えたシャンソンのコンサートにも寄付をしている。

もう一つ、猪鼻さんの社会貢献活動で忘れてはならないのは、それを支える支援者の存在。館林での

寄付活動に際しては、地元在住の遠戚で友人の長浜隆一さん（76歳）が寄付先の検討や、行事の企画や運営、実施にあたっている。長浜さんは赤生田地区の集会所の建設の際も、現地の実務担当者として尽力している。総額7000万円の事業だけに、経理の処理から施工業者の手配まで並大抵の努力ではなかったはずだが、もちろんこれもまったく無報酬のボランティア。

「ボランティアはこれからも、ずっと続きますよ。私が逝ってもまだ続きます（笑）。

資金もたっぷり用意してある。

息子夫婦と長浜さんにも、どのように続けていく



平成8年に猪鼻さんの寄付で整備された、大林稻荷神社と集会所、子どもの遊び場

かよく言ってあるからね」

猪鼻さんにとって、社会貢献と株式投資は共に世代を超えて存続する、超長期の事業なのである。

（本誌・伊藤周太）

## 今月の一冊



### 『敗者のゲーム（改訂版）』

チャールズ・エリス著 鹿毛雄二訳/日本経済新聞社

#### ○株式投資は「敗者のゲーム」

本書は株式投資を行うすべての人が読むべき、古典的な名著。エリスは現在の株式市場では機関投資家の割合が増え、株式投資は相手のミスによる自滅で勝負がつく「敗者のゲーム」になっているという。

冒頭でエリス自身が「この二百数十頁を読めば読者は投資家として成功する方法を学ぶことができる」と言っているように、この本には株式投資のエッセンスが網羅されている。それだけに論点も多く、また目から鱗が落ちる箇所が非常に多いのであるが、その中で筆者が最も感動した2点を紹介したい。

#### ○なぜ証券会社の営業マンの言う通りにするとうまくいかない？

筆者も株式投資を始めた約20年前に、証券マンに聞けば値上がり確実な株がわかり、簡単に儲けられると

思っていた。しかし、結果は惨憺たるものだった。当時はその理由について明確にはわからなかったが、この点についてエリスは「証券会社の担当の人に気をつけなさい。多くの場合、素晴らしい人たちである。しかし、彼らの仕事はあなたを儲けさせることではない。あなたから儲けることである」と言われている。言われてみれば当然なもの、まさにコロンブスの卵で目から鱗の至言ではあるまいか。

だからこそ、証券マンは短期で売り買いさせるため急騰銘柄を推奨することが多い。言われる通りに買ってしまおうと高値つかみをしてしまい、その後損切りで売らざるをえなくなったり、売りに売れず、塩漬けにして抱え込んでしまうケースが多いのではなからうか。

#### ○タイミング投資はなぜ成功しない？

1960年1月にアメリカのS&P500（アメリカの代表的な株価指数。上場銘柄全体の値動きを反映するように設定されている）に投資された1ドルは、複利の効果もあり1990年6月には19.45ドルになったという。

しかし仮にこの30年間のうち、株式市況がベストだった10ヵ月間を逃しただけで、結果は6.58ドルになってしまう。この市況が絶好調だった10ヵ月間とは、全体のわずか3%に過ぎない期間なのだから、タイミングをとらえるのは至難の業。

やはりエリスも言っているように、常に「長期投資家」を標榜し、市場の最悪期にもフルインベストでのぞむことが、市場の活況期にも参加できる現実的な方法ではなからうか（エリスはこれを、「ひどく単純なアドバイス」と言っている）。

短期的な市場の予測は誰にもできないので、タイミングを見た売買は「市場の最も輝く時期」を逃す可能性があるのだ。

（相山豊 ファイナンシャルプランナー）